

健康文化

告知

今井田 二三子

七月の或る朝早く「相談したいことがある」と告げられ患者さん御夫妻が訪れられました。一ヶ月程前に、診療の合間に娘さんの病状についてチラリと洩らされたことがありましたので、若しかするとその事についてではないかという思いは私にありました。

「実は、娘が卵巣の腫瘍で今入院中です。病名は分かっていますが、本人には話してありません。先日、先生が病名を娘に伝えるように言われましたが、どうしたものかと迷って相談に来ました。」迷い、思い悩まれている様子が私の心にもそのまま伝わるような一言、また一言に私も直ぐには答えができませんでした。

告知を受けた人が、どんな思いをされるであろうか、私の頭の中に、種々な場面が走馬燈のように回り始めました。近い将来に生命の終わりを迎えるかもしれない、そのことについて、どのような心の準備がその人にあるだろうか。天国に召されて神の祝福を受けることを信じる人、かつてお会いしたカトリックの神父様が、天国の存在を信じ切っていらっしゃるのに驚き感動したことがあります。「観念の上でイメージされるのではないのでしょうか」という私の失礼な問いに「天国はあります」と爽やかに答えられたのを今も思い出します。

また私の母のように人生を生き抜いて迎えた恍惚の状態、幻覚の中をさまよっているのか、或いは西方浄土を信じているのか「阿弥陀様に迎えを頼む」と繰り返している人もあります。しかし、何も精神的なよりどころを持たず若くして逝った兄は、死期が迫っているのを主治医から告げられた母が、その通りを兄に話したところ、全く食欲のないのにやっとの思いで一匙二匙口に運んでいた食事をその日から一切口にしなくなり、苦痛の訴えも少なくなったのが痛ましく、今もあれは告げなかった方がよかったのではないかと強く思い返されます。

自問自答の後、「どうしても病名を本人に話すことができませんと先生に御返事されたのでしょうか」ようやく私が答えることができた言葉がこれでした。「ええ、そうします」御両親の顔が心なしかホッとされたように感じられました。

本人に対し回復の望みの薄い病気の告知、私達にも問われるこの言葉の是非について、残念ながら私自身の確かな答えを持っておりません。早期癌で、ほぼ完全摘除が可能と思われる場合は伝えますが、摘除が不可能と思われる時は私は現在も最後まで否定を続けています。

肺癌で亡くなった義理の従兄の妻は健診で自分も肺癌であるのが発見されたとき、実子がないので「私には片付けなければならないことがありますので、先生の御診断を、お考えどおり聞かせて下さい」と告げ、手術不能で残る手段は化学療法のみと聞いてきたようでした。それを淡々と私に語り、入院先も自分で決め、治療のリスクについても細かく説明を受けた様子でした。数ヶ月後、一時帰宅が許された時、訪れた私に「大体家のことは終わり、地域の役も引継をすませ来週病院へ帰るが、今度の治療は最後まで続けられるか分からない」と他人事のように語り、私はその意志の強さに感嘆しました。

さて、私は、と問いかけてみますと、従兄の妻と境遇が似ているところから、身辺整理のため告知を受ける必要を感じていますが、かつて結核の告知を受け、将来働くことは不可能に近いと告げられたとき、たとえ明日生命を終わることがあっても、治る可能性のある病気であってほしかったと痛切に思ったのが思い出されます。今も告知を受ければ同じ思いをするのではないかと思います。

さて、患者さんの娘さんに戻りますが、その後の断片的な話を繋ぎ合わせますと、化学療法の副作用の説明のため告知が必要であったようで「先生が自ら話して下さいました。それを聞いた後も、娘は落ち込むこともなく、何となく分かっていたよ、でも子供達のために頑張るから」と両親に言われたそうです。不治の病気の告知をする、告知を受ける、情けないことに私は、ケース・バイ・ケースといったところで自分を納得させています。

(内科開業医)